



ユダヤ主義というものに対しても不快感を露わにしています。彼はフランスに帰化し、自らをフランス人と考えていましたが、ユダヤ人としての自覚もまた同時に持っていたということがいえそうです。キスリングの中にはフランス人としての部分とユダヤ人としての部分が同時に存在していたのではないのでしょうか。キスリングの作品の中にはフランス的な優雅さや明るさがある一方で、ユダヤ的な哀しみや暗さもあるように思えます。そして、それらが混在することこそが、キスリング作品の大きな魅力であるように感じるのです。

キスリングの描いた《ミモザの花束》を見てみましょう。輝くばかりに美しい、豪華で華やかな花が描かれています。黄色いミモザが画面全体をパッと明るくし、それぞれの花が生き生きと、鮮やかな色彩で表現されます。ここには、まさに生きる喜びが描かれているようです。キスリングの花の絵は、確かに憂いというよりは、生きる喜びを謳ったものと思えます。

それでは一方、哀しい絵は、というと、《二人の姉妹》はどうでしょうか。寄り添って立つ二人の姉妹の前には誰かいるのでしょうか？二人とも哀しげな顔をして何かを見つめています。もしかすると病気の人がいるのかもしれませんが、実際のところはわかりません。画面は地味な色を中心に描かれ、全体にメランコリックな雰囲気に覆われています。ここには、生きる哀しみがあるように思うのです。

次に、裸婦の絵を見てみます。《アルレッティの裸像》です。物憂げに横たわる女性、そして彼女を飾る布の豪華な模様。彼女の体は光り輝くように美しく描かれます。華やかだけれどどこか物憂げなこの裸婦像を見ると、画面にキスリングの華やかさと憂いが混在しているように感じられます。ちなみにこの作品のモデルのアルレッティはミュージックホールの歌手から転身した映画女優で、

「北ホテル」、「天井桟敷の人々」などに出演。スター女優の仲間入りを果たしたところでした。彼女の絵を制作しているときには、沢山の彼女のファンがアトリエに押し寄せて、キスリングは嫉妬しながら描いたそうです。

キスリングの華やかさがよく表れた花の絵、憂いの部分がよく表れた姉妹の絵、そしてその二つが混在する裸婦、といったように、いろいろな作品を見てみると、彼の二面性が様々なかたちをとって表れているように思います。

同じエコール・ド・パリの画家パスキンは、ポール・ギョーム画廊でキスリングの個展が開かれた際、「あなたはキスリングをどう思いますか」というアンケートを行なっています。友人たちの回答は次のとおりです。画商バスレル「私からまき上げる盗賊。」ブラック「キスリング、でかした。このたくましい絵。」コクトー「純心な画家だ。」ギュスターヴ・コキヨ「彼の裸婦はすばらしいものが多い。」ポール・ギョーム「もし愛好家たちが彼の絵に飛びつかないなら、彼らにキスリングの絵をよく研究しにフィラデルフィアのバーンス財団に行くべきだといってやりたい。」リビオン（ロトンドの主人）「私の最上のお客様です。」パスキン「かつて彼はもっと美男子だった。今では彼の絵の方が私を興奮させる。」ピカソ「キスリングは大物の画家だ。」サロモンおばさん（ジョゼフ＝バラ街3番地の管理人）「私をてごずらす人です。」（注2）

このようなコメントを見ていると、キスリングは当時、周囲の人々に大変愛されていたのだということが伝わってきます。画家としての仕事も、友人との関係も、結婚生活も、全てにおいてキスリングは恵まれていたようです。エコール・ド・パリの画家は、モディリアーニのように荒れた生活をしてしかも早く亡くなったり、パスキンのように愛人と妻との間で悩み、最終的には自ら死を選ぶなど、

前半に来館されたお客様からの苦情だったのですが、案の定少なからぬお叱りの言葉を頂戴することになりました。中には、せっかく楽しみにやってきたのに、これでは詐欺ではないか、との強い憤りを述べられるお客様もいらっしゃいました。あるいは、重要作品を前後期に分散させることにより、二度の来館を促すという経営上の策略ではないのかと不審を抱かれる方もみえました。事前にある程度の予想をしていたとはいえ、やはりお客様からの苦情の数々は、主催者にとって大きな反省材料になりました。

不安要素を予測していたにも関わらず、あえて半期展示の《黒き猫》をメイン・ビジュアルに使用したのは、春草の代表作としてよく知られていること、広報媒体に使用した場合の図柄のインパクトの強さ、さらには近年の猫ブームなども配慮してのことだったのですが、その目論見はある意味まんまと当たったと言えます。感想ノートやアンケートには、《黒き猫》に関する言及が圧倒的に多く、入場者数を見ても、会期後半は前半のほぼ倍の多くの方が来館されています。その全てが猫目当て、というわけではないでしょうが、《黒き猫》を目指して会期後半の鑑賞を選択された方はかなりの数に上ったはずです。この期待の大きさは、逆に前期に来館され見逃した方々の失望の大きさと比例しているわけで、厳しいお叱りの言葉も<sup>も</sup>宜なるかなという感じですが。印象に残る広報という点では今回の試みは成功したと思えますが、半期展示という情報の徹底周知という点では課題が残りました。（F）

シャガール展、通常のものとはかなり趣が違います。「三次元の世界」とは立体作品のことで、彫刻、陶器、レリーフなど、石や粘土、石膏などを材料として制作された作品が、この展覧会では重要な役割を果たします。シャガールの立体作品、と聞いても今一つピンと来ないという方も少なくないでしょう。過去の展覧会では、その一部が紹介されることはあっても、今回のようにほぼ全貌がわかるほどの規模で企画されたことはありません。その理由の一つは数が極めて限定されているからです。ブロンズのように複数のコピーを持



《ミモザの花束》1946年



《アルレッティの裸像》1933年

いわゆる普通の幸せとは程遠い人生を送った画家が多いのですが、キスリングはその中の例外であり、一般的に見ると幸せな人生を送った画家の代表といえます。

そんな明るい人生を送った彼の作品の中に深い憂鬱が感じ取れることは、少し不思議な気もするのですが、自分の中にある憂いの部分を作品として美しく表現することができた、そこにキスリングの魅力があります。その憂いの部分は、やはり、ユダヤ人としてのキスリングが表れている部分であるようにも私には思えます。そして、陽気な性格のキスリングも、哀しみを内に秘めた一個の人間であったということを改めて感じます。

《ルネ・キスリング夫人の肖像》に見られるつやつやとした絵肌の輝き、それは光を感



《二人の姉妹》1950年

じさせます。それに対して背景の暗さは闇を思わせます。この一枚の絵の中に、キスリングの華やかさと憂いは混在します。そしてここには、モデルのルネの性格が表れているのかもしれませんが、それよりも、キスリングの性格がモデルに反映されたかたちで表れているのかもしれませんが、もしくはその両者が複雑に絡み合いながらひとつの作品を創り出しているとも考えることもできます。いずれにせよキスリングは、妻という自分に一番近い人物に自身をも投影させて作品を描き出しているということになるでしょう。この作品は、キスリングの妻ルネ・キスリングの肖像であると同時に、キスリング自身の肖像でもあるというわけです。（AN）

（注1）キスリングの名前については、「キスリング」展カタログ（2007年、茨城県立美術館他編集）p.22に詳述されている。

（注2）「生誕100年記念 キスリング展」カタログ（1991年、毎日新聞社編集）p.125参照。

## 展覧会の舞台裏

### 広報⑨

#### 黒猫の祟り？

2月26日に終了した「永青文庫 日本画の名品」は熊本、細川家に伝来する日本画の傑作をご紹介した展覧会で、作品の質の高さもあって大変ご好評をいただきました。この展覧会には菱田春草と小林古径による3点の重要文化財が出品されていました。ご存知の方も多いかと思いますが、国の指定文化財については様々な展示条件が付与されており、その高いハードルをクリアできないと展示はできません。その条件の中には展示期間も含まれており、原則として同じ作品は年間60日間、状態のよくないものについては30日間という展示制限が設けられています。永青文庫展の会期は6週間余りですから、原則に従えば全期間の展示も不可能ではありませんが、様々な条件を勘案して3点の作品は前期に1点、後期に2点と、それぞれ振り分けて展示することになりました。この後期の2点の中に、菱田春草の《黒き猫》が含まれており、この作品を展覧会のポスターやチラシのメイン・ビジュアルとして使用しました。会期の後半のみに展示される作品を、広報のメイン・ビジュアルとして使用することには、美術館内でも色々な意見がありました。一番心配していたのは、ポスターやチラシに魅かれて会期

## 感想ノートから

#### 永青文庫 日本画の名品

前期：1月14日(土)～2月5日(日)  
後期：2月7日(火)～2月26日(日)

「ずっとみたかった春草の《黒き猫》がみれて良かったです。感動しました!!」

永青文庫展のシンボルとしてポスターやチラシの図柄に採用された、菱田春草の《黒き猫》。作品は2月7日からのお披露目でした。この日以降、展示室の出口に置いた「感想ノート」には、「《黒き猫》に会えてうれしい」という書き込みがいくつも見られるようになりました。実際、前期が始まって間もない1月17日から1月22日までの6日間の平均入場者数は457.5人/1日で、これが後期が始まった2月7日から2月12日までの6日間では857.5人/1日となり、関係者の予想を上回る《黒き猫》の人気ぶりが明らかになりました。

「前期と後期のラインナップの差が激しいと思います。理由あって前期しか来られず、後期の方が見たい絵がたくさんあったので残念です。」

油彩画に比べて日本画はデリケートなため、光によるたい色を防ぐなどの理由から公開期間を短くする必要があります。本展覧会

では途中に展示替えを実施し、一部の作品を半期展示とすることで負担をかけないようにしました。まず、重要文化財に指定されている春草の《落葉》は前期に、同じく重文の《黒き猫》は後期に振り分けることにしました。次に、前期は《落葉》の静寂感を損なわないことを第一に考えて、派手さは無くても味わいの深い作品で周囲を固めることにしました。そのため、後期には色の鮮やかな作品や金地の作品が多くなり、上村松園の《月影》など女性が主役の絵画が増えました。前期と後期で印象の異なる展示となり、この点は賛否の分かれる結果となりました。

「大観、春草をおめあてに来ましたが、一番よかったのは仙厓でした。今日まで名前を知らなかったのが、今後要チェックします。てきとーに書いたようにも見えないし、マンガっぽい作品ですが僧侶ですから、きっとものすごい深いものがあるのでしょう。」

仙厓和尚は岐阜県関市の出身でありながら、主に博多で活躍したこともあって、東海地方での知名度はあまり高くありません。出光美術館や福岡市美術館のように、仙厓の作品をまとめて見られる美術館もこの地方にはないため、こうして本展覧会で仙厓の禅画を紹介する機会をいただけたのはたいへんな幸運でした。永青文庫のご協力に深く感謝申し上げます。（nori）

## 展覧会 現在進行形

#### シャガール：三次元の世界

2017年12月14日～2018年2月18日

日本でも人気の高いシャガールの展覧会は、毎年のようにどこかで開催されており、やや食傷気味かもしれませんが。当館でも開館して2年目の1990年に回顧展を開催しており、今回は2度目になります。しかし、タイトルをご覧になればお分かりのように、この

つものがないわけではありませんが、ほとんどは1点もの。つまり作品数が少なく、おまけに石や石膏、焼き物など、デリケートな材質のために、取り扱いにも細心の注意が要求されます。今回はシャガールのご遺族の全面的な協力により、この貴重な立体作品をまとめてご紹介する日本で初めての機会となりました。

出品点数は170点前後で、その内の三分の一強が立体作品。残りはおなじみの絵画作品になりますが、立体作品と平面作品がどのように関係しているのかを探るのもこの展覧会

の見どころになります。シャガールが立体作品を手がけるようになるのは、60代半ば頃からですが、若い時期に描いた絵画作品の中にも彼の立体や空間に対する意識がはっきりと刻み込まれています。さらに彼は、舞台芸術にも早くから関わっており、教会のステンドグラスなども数多く手がけています。こういった経験の蓄積がシャガール芸術の深化に少なからぬ影響を与えており、単なる立体作品の紹介に止まらず、その芸術の本質にこの展覧会は鋭く切り込んでいきます。どうぞお楽しみに。（F）

## 郷土の作家たち

山田 純嗣 (やまだ じゅんじ/1974年)

山田純嗣の制作は、過去の「名画」に描かれたイメージを個々の「オブジェ」として立体化することから始まる。石膏を纏った「白いオブジェ群」は、カメラの前で配置・構成され、撮影される。その後、モチーフとなった作品の原寸にまで引き伸ばされ、プリントされた銀塩印画(ゼラチンシルバー・プリント)には、トレーシング・ペーパーが宛がわれ、ペンとインクによってその写像が「転写」されるのだが、その時、オリジナル作品にはないイメージが自由に「付加」されることになる。完成したドロ잉は銅版に製版され、プリントされた印画紙に刷り重ねられる。作家は、この工程を「インタリオ(凹版)・オン・フォト」と呼ぶ。

反転と転写、複製が重ねられた画面には、偏光パールやラメを含んだ顔料によるペインティングやコーティングが施され、オリジナルの絵画にはない微妙な陰影や奇妙な光沢を伴って「再現」される。

平面から立体への往還。絵画から写真へ、さらに版画を刷り重ねることによって、画面には再現性と表象が重層していくことになる。

《日月山水》は、西洋の遠近法とは異なる東洋山水画の「三遠」に注目し、「解釈」したものである。立体を制作することによって作家は、



山田純嗣《明山水》2016年 (PAT in Kyoto 2016展示風景)

オリジナル作品における筆跡や、図像の反復による画面構成、さらには視点の違いやズレを見出したと言う。

「山は真横から、水面は見下した視点から描かれているので、ひとつのカメラで一度に撮影するためには立体の方に二つの角度をつけざるを得ず、非現実的なものになりました。」

画家の視点と構想をカメラ・アイに置き換えることによって確認された「非現実的なもの」とは、すなわち、絵画の本質＝イリュージョンイズムを指す。

「3Dプリンター」が急速に広まり、より身近なものとなりつつある今日においては、山田の制作方法はあまりに煩雑でナイーブに映るかもしれない。だが、「反転」と「転写」を繰り返して獲得された重層的なそのイメージは、確かに「絵画」を見ることの楽しみへと誘うものでもある。名古屋在住。[J.T.]

## どっがおもしろい?!

山本 富章《無題》1987年

ミクストメディア 286.0×382.0×16.0 cm



山本富章(1949年蒲郡市生まれ)は1980年代に絵画の新たな在り方を示し、国内外で注目を集めた美術家です。この時代、山本は平面四角のキャンヴァスのかわりに、西洋建築のアーチや扉を想像させる凹凸のあるパネルを使用しました。また、鮮やかな朱赤や黄色、ターコイズグリーン、荘厳な黒と金の絵具を主に用いて、激しい筆触や斑点で画面を覆っていく作風を築きました。名古屋美術館所蔵の《無題》(1987年)もそうした特徴を持つ作品で、パネルの両脇からは額縁の破片が突き出ています。

2015年3月に山本は長年勤めた愛知県立芸術大学を退職して、人生の節目を迎えました。2016年には豊田市美術館(4月16日-6月26日)と碧南市藤井達吉現代美術館(10月15日-12月4日)で大規模な個展が相次いで開催され、改めてその画業への感心が高まりました。当館でも、碧南での個展と重なる時期(11月3日-12月18日)に《無題》(1987年)を常設展に出品しましたので、その間に寄せられたご来場の方々の感想をここに紹介します。(nori)

「私はこの作品を見たときに、とてもわくわくしました。この扉をあけたら、どんな世界が広がっているのだろうと想像すると、扉がこんなにもカラフルで楽しそうな感じがするのだから、きっとすてきな世界が広がっているのだろうと思いました。」(まるさん 20歳)  
「まるで錬金術が使えるのではないかとわくわくさせられました。自分たちの心の中にある扉とは、こういうものなのかもしれません

ね。」(?さん 19歳)

「おしょうがつみたい!(とうごさん 4歳)」「『おみこし』のように見える。赤で華やか!」(Tom & Jerryさん ?歳)

「仏壇、先祖がえり、とびらをひらくと黄金のお釈迦様が勢いあつてしゃるに違いない。」(キャサリンさん 67歳)

「神社の扉を想像しました。何かひきこまれるようなものがあり、見入ってしまいました。赤をベースとしていたので、血もイメージしました。向こう側に何か怖いものがあるんじゃないかと思いました。一番印象に残っている作品です。」(山さん 19歳)

「何故か江戸時代につながる門に見えた。」(Y.Nさん 38歳)

「このとびらのさきはきれいなみずのみずーみがあるとおもいます。」(なおさん 7歳)

「社会の扉に見えた。端はゴールドで大きく立派だが、赤い部分などの端にあるおうとは不ぞろいで、色は若干不気味で、世間のごちゃごちゃや人々の葛藤のように見えた。この扉の先にはどんな世界が広がっているのか...?」(山田さん 18歳)

「この扉の向こうには自分が想い描いた道があり、行きたいのにそれをばばんでくる奴らが出て、もともと白かった扉は我々人間の赤い血でうめつくされて、その上にわずかな(敵?)の青い血がついて、敗北を意味している。それに武器などはへんやなにかのあともあって激しい戦いだった。と思いました...」(ナーシさん 17歳)

「近くで見ると斑点のところは青の中に少しだけ緑があったり、赤の中に青が少しだけあったりと、色の使い方が面白かったです。近くで見ると迫力があり、印象に残る作品でした。」(青さん 19歳)

「ドロドロとした絵の具が赤い扉の上でゆっくりとうごめくような印象。扉の中にはあつく、煮えるような生というか、この方の濃厚な生きるエネルギーを感じました。」(Y.Mさん 30歳)

「絵の額縁をたくさん使っていたのがとても印象に残りました。そして、中央の赤い絵の具でぬられた板が私には門のようなものに感じられました。題名の『無題』というの、いったいこれが何を表しているのかを見たものに想像させるような魅力的なものであったように感じられました。」(優希さん 14歳)

「額縁にこんな使い方があったのか?!と感心したのと、こんな使い方して大丈夫か?(パチは当たらないのか?)と心配になりました。」(秀明さん 52歳)

藤田 忠正(ふじた ただまさ/1849-1929)

藤田忠正は、1849(嘉永2)年9月27日に名古屋城下の五条町で尾張藩士の家系に生まれる。幼名は鉦五郎。

維新後、上京して、1875(明治8)年12月から国澤新九郎の洋画塾彰技堂に入塾して、その没後は国澤を継いだ本多錦吉郎の今川小路画学講習所(後に彰技堂へ改称)で、1878(明治11)年5月まで洋画を学んで、神奈川県師範学校に画学教員となった。当時の神田・今川小路には、工部美術学校を退学した小山正太郎、浅井忠らが移転開設した十一字会研究所もあり、彼らの教授を受けたかもしれない。また横浜では、「居留外国人」の画家チャールズ・ワーグマンなどにも師事した。

1881(明治14)年8月、神奈川県師範学校を辞職、名古屋に帰郷して、翌1882(明治15)年3月に愛知県立第一中学校(現在の旭丘高等学校)に図画助教諭として赴任した。同年11月には、同校と愛知県第一師範学校の図画教諭であった河野次郎の長野県師範学校への転任に伴って、同校と愛知県第一師範学校の図画教諭を兼任(1884年9月まで)した。

愛知県立第一中学校の『鯨光百年史』には、1902(明治35)年に「二〇年勤続の藤田正忠

教諭の慰労会」が開かれ、1909(明治42)年には「二〇年以上勤続の藤田忠正、...の七教諭の表彰を行い、その肖像を生徒控室に掲げ、履歴などを記した頌徳記念の冊子を生徒に頒布した」とある。また、1911(明治44)年の皇太子嘉仁親王の名古屋行啓に際しては、「藤田教諭担当の三年の図画」が授業参観されるなど、尊敬を集めて、1917(大正2)年9月までの35年間奉職した。

この間に、洋画家・水野万資(愛知県第二中学校の図画教諭)を育て、水野や野崎華年(兼清)と名古屋に洋画講習所を開き、水野、野崎、浅井有鄰とともに『小学校用図画帖』を編纂するなど、名古屋の近代洋画の黎明期に重要な役割を果たして、1929(昭和4)年2月に死去した。作品の現存は確認されていない。(sy)



藤田正忠(1909年)

## イベントレビュー

河村み 介 一生と死のあいだ 対談

「ポジション2017 河村み 介 一生と死のあいだ」の記念対談は出品作家の河村みさんと看取り士の柴田久美子さんをお迎えしました。河村さんが今回の展示会に出品したのは、ガンに罹った母親を介護し看取った経験にまつわるご自身の思いと深い関係のある作品でした。愛する身近な人を亡くするというのはとても辛く大きな喪失の経験です。しかし、河村さんは母親を介護し看取ることができたことはとても幸せな経験であったとも感じられ、そこから「看取り」ということに興味を持たれたそうです。

この世の中に決して死なない人というのは存在しません。人は、いつかは死ななければなりません。いつか家族の誰かに介護が必要になった場合、その介護が必要な本人や家族のサポートをしてくださるのがケアマネジャーや介護士や看護師です。亡くなった後は葬儀に関わる人たちが様々な手続きのサポートをしてくれます。そして、亡くなる前から亡くなるまで本人と家族の物理的・精神的なケアをサポートしてくださるのが柴田さんのような看取り士というお仕事の方です。

対談では、河村さんが体験したこと、それがどのように作品に結びついていったのか、柴田さんのお仕事やご自身が経験されたこと、人が死ぬことというのはどういうことなのかというお話が出ました。私にとって印

象的だったのは、「看取る」ということは「見守る」ということでもあること、または、私たちは生まれた時のことを覚えていないのにいつの間にか生きていくというように、死ぬことも生きていくことと同じように当たり前のことだというお話でした。それから、河村さんが描いたたくさんのドロ잉は河村さんのお母さんが描いたのではないかとのお話。もちろん、ドロ잉は河村さんが描いたものであって、お母さんが描いたはずはないのですが、河村さんの中にはきっとお母さまの存在がずっとあるでしょうし、また人が存在したという事実はなくなることはないという意味で、不思議と心の中にストンと入ってくるものでした。会場の皆さまからたくさんのご質問があり、河村さんの経験に加え、会場のお客さんの看取りや死に立ち会う経験をお聞きするうちに、私も含め会場のみなさんも思わず涙してしまう場面もありました。様々な方々がそれぞれのご経験をお話されているのをお聞きして、河村さんの作品がたくさんの人の思いを開いていくような感じがしました。(hina)



(写真右:柴田久美子さん 中央:河村みさん)

## イベントガイド

### ■特別展

異郷のモダニズム—満洲写真全史—

会期:2017年4月29日(土・祝)~6月25日(日)  
料金:一般1,200円・高大生800円・中学生以下無料

大陸の風景や生活風俗を記録することから始まった写真表現は、1932年の「満洲国」建国前後より、絵画的な写真表現が流行し、やがて国策としての宣伝活動に利用されていきました。日本の敗戦とともに13年と5か月で崩壊した「満洲国」で展開した写真表現の変遷を、作家自身による貴重なプリント作品や当時のグラフ雑誌など多数の資料でたどりま

### 【関連催事】

#### ●作品解説会(時代背景ごとに4回シリーズ)

①日時:5月6日(土) 午後2時から  
「大陸の風貌—櫻井一郎と〈東亜印画協会〉」

②日時:5月27日(土) 午後2時から  
「移植された絵画主義—淵上白陽と〈満洲写真作家協会〉」

③日時:6月3日(土) 午後2時から  
「宣伝と統制—満洲国の写真政策」

④日時:6月17日(土) 午後2時から  
「建国と崩壊のグラフィズム」  
講師:竹葉丈(名古屋美術館学芸員)  
※いずれも2階講堂・無料・先着180名

### ■常設展(特別展と同会期)

#### 名品コレクション展I

名古屋美術館のコレクションから厳選した作品を紹介します。

エコール・ド・パリ:異郷の地にて、郷土の美術:森眞吾他

#### ■コレクション解析学

日時:5月28日(日) 午後2時から  
演題:「汽水域に生きる」

2階講堂・無料・先着180名  
講師:角田美奈子(名古屋美術館学芸員)

作品:森眞吾《M氏のもう一つの日記》1977年

#### ■びじゅつびつくりたまてばこ「イチおし!」

美術館の作品を選んで、その楽しみ方を体験  
日時:6月24日(土) 午前10時から

※申込締切は5月31日(水) 当日消印有効  
対象:小学生 定員:30名

休館日は月曜日(祝日の場合は翌平日)、4月18日(火)~4月28日(金)、6月27日(火)~10月6日(金)です。詳しくは、美術館ウェブサイトhttp://www.art-museum.city.nagoya.jpをご覧ください。(KT)

## 展評

2017年1月24日(火) - 4月9日(日)  
三重県立美術館

### 再発見！ ニッポンの立体

会場に入ってまず目にしたのは白い招き猫。上げているのは右前足で、人ではなく金運を招くもの。撮影ができ、3章に含まれるものを冒頭に据えているところに担当者の思いを想像しましたが、そんな雑念を吹き飛ばすほどに猫は整った姿をしており、しばし見入りました。この猫には、詳細な作品データがありません。数多ある招き猫からこの1点を選んだ担当者の営為と感覚に感じ入るとともに、後に続く展示をどのように見るかということについて教えられた気がしました。

明治期に西洋化が進み、絵画では「日本画」と「西洋画(略して洋画)」の区別ができました。彫刻にはそのような日本と西洋を分ける区別がありません。日本に前からあった彫刻に類する造形は工芸に主として位置づけられています。この展覧会では、招き猫の他に高崎だるまや土人形も出品されていますが、大量生産品であれば民芸品とみなされることはありません。「彫刻」という言葉には、西洋の造形感覚と価値観が既に含まれています。「彫刻」の名のもとに排除され、今日で

は多くの場合忘れられてはいるものの、しかしなお受け継がれている西洋化以前から日本にあるそれらを「立体」の名のもとに区分を越えて見直そうというのがこの展覧会です。

出品作品は縄文時代の土偶から昨年制作のものまでを含んでおり、技法や材質も多種多様、マネキンやフィギュアも含まれています。展覧会は7章からなる構成。企画者の問題意識を反映した章立てですが、その他の制約もあるため、出品作品のすべてが代わりのないものとは言えないでしょう。ですが、誰もが知る作品に頼らず、企画の意図に沿った作品を積み重ねていることは評価されるものです。企画者の経験と研究の成果がもたらしたものでしょう。

意図や出品の適否はともかく、普段目にする機会の少ないものが多く出品されているのはそれだけで興味深いものです。常滑の陶彫



会場風景

## 展評

2017年1月28日(土) - 3月25日(土)  
Botão Gallery

### 平山昌尚 絵 | PICTURE

見た瞬間、一筆書き?とも思ってしまうほど、最小限の線だけで描かれた絵。シンプルな表現だ。人間の目とは面白いもので、点が2つと線が一本引かれるだけで、顔だと認識できてしまうように、どんなに少ない線であっても、それが何らかの形を形作れば、そこに形態の存在を見つけ出してしまふものなのだ。描かれていたのはイルカのような生き物、木、メロン。等身大以上の、壁いっぱい描かれた線をそれらの形態であると認識した瞬間、イルカの存在感を感じ、巨大なメロンの存在に圧倒される。しかし、それはやっぱり線にすぎず、線と線の間は空間で、メロンが転がる様子を思い起こすような擬態語的な表現もあって、風が通り抜けていくようななんとも言えない解放感を感じた。

MAT, Nagoyaが運営するボタンギャラリーでは若い才能を紹介していて、今回はその第9回目。今回紹介された平山昌尚さんは、シンプルに伝わる図というものを目指して、落書きのようなユーモアあるドローイングを描き、ファッションやイラストやデザインなどアートのみならず幅広く活躍している作家だ。

ギャラリーの2階には、壁にボールとバットが描かれていて、その向かい側には、ぶつかったことを示す、マンガに出てくるような擬態語的な表現であるギザギザの形が描かれていた。バットで打ったボールが向かいの壁に当たったことを表現しているとのこと。確かに、壁いっぱい壁面として描かれた線の表現が、アニメーションのように空間の中を動いていくような錯覚に陥る。自分の目の前をボールが通り過ぎて行くイメージが容易に想像され、自分がアニメーションの中に入り込んでしまったみたい楽しい。絵で何が伝えられるのかという、絵が絵としてできる役割について最小限の要素で挑戦しているのだろう。絵にまつわる様々な言説もややこしい理論もすべてぶっ飛ばすような、スカッとした表現がとても気持ちよかった。(hina)



会場風景

## BOOK

### 『闇に消える美術品』

(エマニュエル・ド・ルー、ロラン＝ピエール・パランゴ著、菊池丘訳、東京書籍、2003年)



以前この欄で『ムンクを追い!』という本をご紹介したことがあります。かの有名なムンクの『叫び』盗難にまつわる、まるで極上のミステリーのようなノンフィクションでした。ムンクに限らず、美術品盗難の話題はしばしば新聞紙面ににぎわしますが、その件数はなんと年間数万件にも及び、被害総額は数十億ドルを超えるのだそうです。しかも、その犯行の大半は「依頼人」による「注文」を

受けたプロの犯罪組織によるもので、その結果生み出される巨額なマネーは、麻薬、武器に次ぐ彼らの重要な資金源となっているとのこと。美術館に勤務する我々としては、麻薬や武器と同列に扱われることに不快感を抱きますが、裏社会の彼らにとっても美術品は色々な意味で魅力的なものだということなのでしょう。二人のフランス人ジャーナリストによる『闇に消える美術品』は、美術品盗難にまつわる興味深い裏事情の数々を私たちに教えてくれます。例えば、あんな有名な絵を盗んで一体どうやって換金するのか? という疑問について、裏社会の流通ルートや、中南米の麻薬王の別荘には、そんな名画がゴロゴロしているらしいという噂話など、興味深い情報がこの本には満載です。そして美術品盗難は裏社会の専売特許というわけではありません。歴史上の権力者たちによる、戦利品としての美術品の略奪という表舞台の行為についても、この本では詳細に綴られています。その多くが近年、原所有者(所有国)からの返還請求に揺れ動いているという事実は、多くの方がご存知だと思いますが、それに対する世界有数の美術館の副館長が発した言葉は事態の深刻さを物語っていますが、最後にそれをご紹介しましょう。「要求があるからといって、すぐに誰にでも返還したりはしない。そんなことを30年も続けたら美術館はどこも空になってしまう」。(F)

や平櫛田中の『福聚大黒天尊像』《満徳恵比寿尊像》などは、私には何度見ても新鮮な印象があります。知られていないけれども美し

## 展評

2017年2月18日(土) - 3月19日(日)  
アートラボあいち津橋(名古屋市)

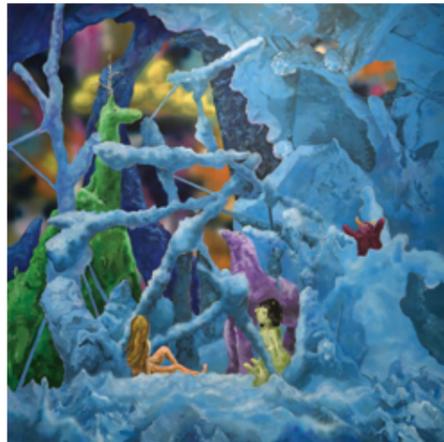
### SKY OVER IV

「SKY OVER」は愛知県下の3芸術大学が、それぞれ作家を選出して作る企画展です。4回目となる今回は、愛知県立芸術大学から岩瀬晴香(絵画)と長田沙央梨(彫刻)、名古屋芸術大学から山口諒(インスタレーション)と小野功太郎(絵画)、名古屋造形大学から田島圭(絵画)と鈴木優作(パフォーマンス)が選ばれました。約半年前に実施された前回の「Ⅲ」では、そろそろ若手と呼ぶのが憚られるような実績ある作家が選ばれていたのに対して、今回の「Ⅳ」では、ここ数年の間に大学を卒業・修了した作家が目立ちました。そのため、成熟や洗練の度合いを高めていく必要性を感じた作品もありましたが、おおむね表現の新鮮さに好印象を受けました。

岩瀬晴香の絵画は、伸びやかなブラッシュストロークと光を感じさせる色の扱い方が魅力的でした。そこには卓上の静物や観葉植物



岩瀬晴香《BLACK no. 2》2017年



小野功太郎《border (blue)》2017年

## CULTURE, MOVIE, DRAMA & MUSIC

### 最近見た映画の共通項

時期によって偏りはありますが、およそ月1ペースで新作映画を観ています。直近で見た3本の映画がいずれも実話に基づく作品で、「ヒトラーに翻弄された子どもたち」という共通のテーマで括れることに気づき、まとめてご紹介します。

第二次世界大戦中に実行された「Kindertransport」と呼ばれる秘密の救出作戦に携わった、外交官でも何でもない一人のイギリス人男性と、彼によって命を救われたチェコスロヴァキアのユダヤ人の子どもたち、彼らのその後の人生を追ったドキュメンタリー映画『ニコラス・ウィントンと669人の子どもたち』。東海地方では杉原千畝氏の功績がよく知られていますが、世界各地に同様の活躍をした人々がいたという事実が驚かされる一方、当時子どもの命だけでも、と見知らぬ外国へ送り出した親たち(記録によると全員収容所で死亡)の胸中は察するに余りあります。

戦時中はドイツに、戦後はソ連に占領されたエストニアが舞台の作品『こころに剣士を』。ソ連の秘密警察に追われ、田舎町ハーブサルの小学校へ体育教師として身を隠した

フェンシングの元スター選手は、児童たちにクラブ活動でフェンシングを教えることになる。ソ連の圧政で父親たちはシベリアに送られ、町には男性が少なかった。厳しい指導に戸惑いつつも、彼を父のように慕い始めた子どもたちは次第に上達を遂げ、大会出場という夢を持つようになるが、その開催地はレニングラード。身の危険に躊躇いながら、彼は子どもたちの夢を叶えようと決意する…熱中できるものを見つけた子どもたちの目の輝きが印象的な作品です。

『ヒトラーの忘れもの』の舞台は第二次世界大戦直後のデンマーク。ナチが浜辺に埋めていった200万もの地雷の撤去を命じられたドイツ人少年兵たちが、異国に置き去りにされ、死と隣り合わせの任務や飢え、体調不良、仲間の死と闘い、何度も心折れそうになりながらも帰郷というわずかな希望を抱き続ける姿を描いています。敵国の人間だからと罪のない若者に贖罪を強いることが果たして正しいのか…彼らを監視する立場のデンマーク人の指揮官が悩んだ末に導いたラストの展開には考えさせられます。

何だか暗い映画ばかり…と言われそうですが、懸命に生きようとする子どもの存在が救いとなって鑑賞後は清々しい気持ちでした。学校で習うことのない視点から歴史を知るきっかけとしても貴重な映画です。(3)

### 【編集後記】

「アートペーパー」104号をお届けします。

春到来。明らかにフレッシュ・マン、フレッシュ・ウーマンである若者の姿を街で見かけるこの時期、数十年前の自身を思い出しながら、「新たな気持ち」で自身を鼓舞したりします。皆さんは新年度をどのようにお迎えでしょうか?

名古屋美術館は、今年開館三十周年を迎えます。これまで様々な名画を架けるために釘を打ち続けてきた展示室の壁面は、凹凸に荒れて、鑑賞の妨げになりかねない状況です。そこで、展示室内の改修と南側庭園の整備のため、7月から三か月に亘り休館します。10月には「リニューアル」して「ランス美術館」で新たに披露目ということになりますが、個人的には展示室はもとより、南側庭園の「再生」を大変楽しみにしています。

新年度、美術館でも「行く人、来る人」、つまり異動があるようです。ただ、この原稿を書いている時点での公表は差し控えたいと思います。また次号でも。[J.T.]

アートペーパー第104号 発行日: 2017年4月1日

発行 名古屋市美術館  
[芸術と科学の杜・白川公園内]  
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/  
〒460-0008  
名古屋市中区栄二丁目17番25号  
地下鉄(伏見駅・大須観音駅・矢場町駅)下車  
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005  
休館日: 毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)  
開館時間: 午前9時30分~午後5時  
祝日を除く金曜日は午後8時まで  
※入場は開館の30分前まで

